



第2部
パネルディスカッション **交通犯罪被害のない社会をめざして～被害者の実情と支援の課題**

パネリスト：交通事故被害者家族ネットワーク理事長 佐藤 則男さん
 いわて被害者支援センター理事 大崎 礼子さん
 警察庁交通局交通指導課交通事故事件捜査指導室課長補佐 後藤 里志さん
 自動車事故対策機構 (NASVA) 本部被害者援護部チーフ 笠井 雄介さん

コーディネーター：こうち被害者支援センター顧問、全国被害者支援ネットワーク支援活動検討委員会副委員長 田村 裕さん
 にいがた被害者支援センター理事・支援局長 中曽根えり子さん

第2部パネルディスカッションは、いまなお悪質で危険な交通犯罪による重大事故が相次ぎ、悲惨な被害者が生み出されている現状を前に、被害者・遺族の心情や実態を踏まえつつ、支援の課題をあらためて討議することがねらいだった。

佐藤さんの長男は14年前、青信号で交差点を自転車で渡っていて信号無視のトラックにはねられ、遷延性意識障害に陥った。佐藤さんは5年前から自宅で看護しているが、痰の吸引が必要な夜間に、ヘルパーがいない地域事情もあって24時間365日の介護で「睡眠障害」状態を強いられている窮状を示した。また最初入院した病院での不適切な対応を振り返るなど、高次脳機能障害への認識や看護体制が不十分な実情を紹介し、その充実を課題として提示したほか、交通事故現場での警察官が作成する実況見分図に不信感があるケースなど

を指摘し、改善を求めた。

大崎さんの愛娘・涼香さんは小学1年生の時、兄2人を含む9人で集団登校途中、飛び込んできた飲酒・居眠



り運転の軽トラックに命を奪われた。大崎さんは、病院で対面したわが娘の変わり果てた姿や手に感じた身体の冷たさを「今も忘れる事ができません」と振り返り、飲酒・居眠りという悪質な運転にもかかわらず、求刑より1年軽い懲役4年の実刑判決だった刑罰の軽さや加害者の誠意のなさへの怒りや失望、娘のいないことへの悲しみや苦悩、周囲の人たちの心ない言葉や対応への辛さなど、さまざまな困難に向き合わねばならない実情を吐露。さらに小学校の配慮で卒業証書もらったが、修了番号がなかったため「これが生きている子と生きられなかった子の違い」とあらためて現実を突き付けられた思いがしたエピソードを紹介するなど、遺族の心情を

切々と語り、支援に細やかな心遣いがいかに大切かをアピールした。

警察庁の後藤さんは、交通被害者に対して警察が行う支援を説明。また、飲酒ひき逃げなどの「逃げ得」を許さないよう、昨年施行の「自動車運転死傷行為処罰法」の適用などで厳格適正に捜査を進める方針を示した。自動車事故対策機構（NASVA）の笠井さんは、自動車事故による高次脳機能障害の人を専門に治療と看護を行う療養センター（全国4カ所）と委託病床（同3カ所）や、介護料の支給、交通遺児育成資金の貸与など同機構の事業を紹介し、活用を呼び掛けるとともに、援護体制の充実への課題を提示した。

